
僕と彼女をつないだ物語

かさのきず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女をつないだ物語

【Zコード】

Z6264F

【作者名】

かわのさず

【あらすじ】

余命一ヶ月と申告された僕。そんな僕の元に、一通のメールが届いて……

僕の最後になるであろう夏も、終わりに近づいた時、僕のもとで一通のメールが届いた。

それは、僕が病室の暗い雰囲気に耐え切れず、屋上に出て風を受けていた時で、普段は電源を切っている携帯の電源を入れた時でもある。

「その日、僕は彼女と出会った」

僕はメールの本文を口に出して読んでみた。

他には何も書かれていなれば、まるで書き始めの小説のようだつた。いや、それそのものだと思つ。

小説は好きだ。

小説の中でなら、心臓の悪い僕でもどんなことだってできるのだから。

だからと言つては変だけど、僕はそのメールにこう返信した。

「彼女は僕の隣に来て、いろいろなことを話してくれた」

次のメールが来たのは翌日、僕がまた屋上に出た時だつた。

メールが入つてきているのを知ると、僕はたまらず興奮して、しばらくの間手が震えてしまつていた。

本文のほうを読んでみる。彼女が海に行つた時のことを話していくれていた。

その中で僕は、彼女に「冗談を言つて笑わせている。

まるで、僕が彼女に本当に言つているような気持ちになつて、僕は声にだしてその台詞を読んでみた。

「それじゃ、まるで黒人みたいだね」

その時、後ろで笑い声が聞こえた。

マズイ。これじゃ、まるで僕が変な人じやないか。

まさか後ろに人がいたとは思ってなかつたので、僕は慌てて振り返る。

「そんなに焼けてなんかないわよ」

そして、

その日、僕は彼女と出会った。

「私ね。一ヶ月後に死ぬよ

最初に、彼女はそう言った。

この一言は多分、自分に深く関わることで相手を傷つけることが嫌だから出した言葉。

そして、今まで僕が言つてきた言葉。

「僕は、あと一ヶ月は持たないんだ」

彼女はさすがに、少し驚いたようで、目を丸くした。

「私たち、一緒だね」

「なんか、運命みたいだなあ

「運命なんだよ。きっと

彼女はそう言つと、急にメールを打ち始めた。

何をしているのだろうと思つたけど、僕は彼女のそれが終わるまで待つ。

メールを送信して、彼女はこちらを横目で見ていた。

僕は話しかけようとした時、ポケットの中で携帯が鳴つた。

彼女からだ。

「私たち、付き合つてみよっか

彼女はメールと同じ文章を口に出して伝えた。

僕は返信画面を呼び出すと、今までにない速さでメールを打つ。

「うん」

そのたつた四文字のために。

それからというもの、僕は毎日屋上で彼女と会って、外に出れない僕らは、メールの文章でのデートを重ねていた。

その日も、僕は彼女に会うために屋上までの階段を上っていた。しかし、途中で息切れを起こしてその場に座り込んでしまう。心臓がすごい速さで脈動している。

これも病気の影響で、本来ならこうして病院内でも歩いてはならないのだが、僕が無理を言って特別に許可をもらっているのだ。

その日以降も、僕が一度に昇れる階段数は減つていき、この数が零になつたとき、僕が死ぬような気がしてゾッとした。

そして、彼女と会つていいくつちに、ついにその日が来てしまった。僕は階段の途中で倒れた。

不思議なくらい、恐怖はなく、ただ彼女に別れを告げたくて僕は携帯を取り出した。

「もう、僕は駄目みたいだ。

天国つてものがあつたらまた会おう」「動かない体を、無理矢理動かして仰向けになると、僕はそつと目を閉じようとした。

だけど、次の瞬間、携帯から聞き慣れたメロディーが流れてきて、僕の意識は引き戻される。

たぶん、もう返信をするだけの力はない。だけど、見ることなら可能なはずだ。

手の中にある携帯を開くと、すぐに受信ボックスを開く。メールにはこう書かれてあつた。

「私の心は、あなたに捧げます」

その文章の意味がわからないまま、僕は目を閉じた。

次に目が覚めたとき、僕は屋上にいた。

「 」

次に、母が自分を呼ぶ声。
体を動かそうとして、自分の体がまったく動かないことに気付いた。

でも、体勢から考えて、僕は今車椅子に座っているみたいだ。
「手術が成功したのよ。あとはリハビリ次第で普通の生活ができる
ようになるわよ」「む

母は喜びを隠せないようだつた。

それに対して僕は、まったく別のことを考えていた。

彼女のことだ。

「僕、一体どのくらいの間寝てたの？」

「一ヶ月間、ずっと眠つてたわよ」

もう、心配したんだから。そう言つて母の隣で僕は落胆していた。
一見、元気そうに見えていたが、彼女も何らかの病気を患つてい
たのだろう。

一ヶ月後に死ぬ。本当に彼女の言つ通りなら、もう……。
「どうしたの？」

いつの間にか、僕は泣いていた。

母はひどく慌てていて、悪いとは思つたけど、涙は止まらない。

「と、とにかく、病室に戻りましょう」

母に車椅子を押されて、僕は病室に戻つた。

いつの間にか移動したのだろうか、僕は別の病室に戻された。

母に一人になりたいからと言つと、案外簡単に僕を残して出で
つてしまつた。

まあ、個室じゃないから一人とは言つづらいけど。

そこで、僕は思いきり泣いた。

なぜ僕は生き残つてしまつたのか。

こんな悲しいのならあの時死んでしまえばよかつたんだ。

悲しさを紛らわすために、僕は携帯の電源を入れる。彼女と僕のメールが、その中には入っている。

そして、僕は受信フォルダを開こうとして、そのことに気が付いた。

メールが、入っている。

間違いなく、それは彼女からのものだった。

震える指で携帯を操作し、僕はそのメールを開く。

件名は、遺書。

「物語を続けよう。君と私の物語を。

私がいなくなつた後でも、君ならできると思うから。よろしくね」
僕はとっさに、携帯を床に叩きつけようとした。

もう、出来るわけがない。なぜ、彼女がいないのに、僕は書かなか
きやいけないんだ。

「それが、あいつと君が繋がつてている証だからだ
いつの間にか、その人は僕の隣に立っていた。

「誰……ですか？」

「医者だよ」

彼は忌ま忌ましそうに、そう呟いた。

「そして、あいつの……父親だ。

君がどうして生きているか、知つていてるか

彼は、僕の返事も待たずに、一人、呟くように、または、懺悔するかのように語り始めた。

「君の心臓。それは、娘のものだった。

ああ、心配しなくとも、娘はなんの病気もなく、ちゃんと君の体
に適応しているはずだ」

それだと、彼女は僕のために死んだのか？

「娘は、自殺することを、とうの昔に決めていたらしい。君に心臓
を渡したのは、そのついでだろう。

まったく、実の娘が傷ついていることも気付かず、何が医者だ
つてんだよ」

彼はそう呟き捨てると、再び僕に向かって話した。

「君と会っているとき、彼女は笑っていたか?」「

何と言つていいかわからず、僕はただ頷く。すると彼は、ほんの少し救われた顔をした。

「なら、君は生きてくれ。

そして、物語を紡いでいけ。それがあいつの望みであり、遺書だ。「頼んだぞ」

退院当日、僕はふたたび屋上に来ていた。

彼女との思い出の場所。

今、僕が感じている感情は、どう表現したらいいのだろう。それが思い浮かばないことが悔しくて、また嬉しくもあった。

僕は携帯を開くと、メールを打つ。

これが、ここからだ。僕の始まりは。

「To be continued.」物語は、続していく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6264f/>

僕と彼女をつないだ物語

2010年10月8日15時34分発行